

‘ο κόσμος, αλλοίωσις ο βίος, υπόληψις.’

71号 1993.7.28

文・編集・発行

恋 怪子

LIVE: LOVE VENDERS 1993.7.6 四谷フォーバレー



ギター・ヴォーカル、ベース、ドラムの3人のバンド。他のバンドを見にいったが発見した。あまりのすばらしさに、きている途中で何度も「すごい、すごい」として声が出てしまった。歌詞がまず完璧に詩作品になっていて、ヴォーカルがそれを完璧に歌にしている。歌詞も歌も、見事に屈指して、歪んでいて、揺れていて、偏向している。それでいて遠きとあっていて、まっすぐである。「みんなたいしてかわらないのになんてこんなにちがうんだろう。現実を観察する鋭い確かな目を自分にも向けている。歌いながら時々ウイスキーを瓶からラッパ飲みするのだが、よくあるポーズじゃなくて「酒でも飲まなまや、やっつけられたい」という感じだ。ギターをひくと完璧にギターリストになって、そのギターは

引き裂くように突き刺すように弾ける。ドラムはメチャメチャうまい。正確でむだがない。音がきれいに響いている。ベースは表情があってうまい。正確でむだがない。音がきれいに響いている。ドラムとベースがギター・ヴォーカルをいかしきっている。3人のバランスはあれ以上望めないくらいいい。全ての音に意味が感じられる。

LIVE: KOOL KRAZE 1993.7.10 高円寺屋根裏Ⅱ

6月26日のライブで KOOL KRAZE が次のライブで解散するっていうのをきいた。その日のライブそのものは、ドラムははやってるし、ギターと歌もキグハブだし、ベースもパワーがなくてガツンとくるものがなかったけど、解散を知らされたときにはガツンときた。

KOOL KRAZE の歌に「きみの大切な恋人は、コンビニで買ったんだろう...、すべてマニュアルどおり、すべてシナリオどおり」という歌詞があるけれど KOOL KRAZE はコンビニで売ってるようなバンドじゃないし、マニュアルどおりでもシナリオどおりでもない独自のものを感ぜさせるバンドなのに、1か月前のライブで「新しくじびかれるバンド」に出会えるというのは大きな喜びである。新たな広野が目の前にひらけているようで本当にワクワクするって思った矢先に、解散なんてね。まったくマニュアルもシナリオもあったもんじゃない。まいったよ。

7月10日、この日で KOOL KRAZE が解散するというわけで、バンド中間のような人たちがいっぱい。KOOL KRAZE の前に2曲弾き語りを行った人(メンバーとは10年程のつきあひだのこと)は、なんか深刻そうな様子で、ことさらに解散を背誦させ、きているものをその気にさせるようなステージ。私はバンド中間の冠婚葬祭のつきあひにでもまぎれこんだみたいだった。

KOOL KRAZE も解散という調味料がなければ「どうって」いうことのない、ライブをやるというルマをはたすだけのライブで残念だった。

LIVE: RED CREAM JUICE 1993.6.22 原宿レイド



「びくびくず」というバンド名が「RED CREAM JUICE」にかわったことは知っていたが、ライブに行かないまま2年たった。ギター・ヴォーカルの大坪サチオは大人のふんいきを感じさせ、なおかつワイルドになっていて、ベースの人は2年前とあまりかわらず、より安定感が増していた。キーボードの人は、ちやんと見は別人かと思って思いうくらいにスリムになっていた。ドラムは新しい人だった。大坪サチオはステージ

で「オレと知りあってまだ1年にもならないのに、なんという強けこみかただ。粉末ジュースのような奴」といって笑わせてくれた。大坪サチオの語体も健在だった。大坪サチオは「大きい人と書いて、大人のロックをやっています」といっていたけれど、たしかに RED CREAM JUICE は大人のロックっていえるものがあるけれど、ピュアなものも強く感じられて、なにげなくやっているように見えるのに、ぐうっとひきこまれていった。後半はとくにすばらしかった。ちゃんときりぎりぎっていたんだ。それがわかってとてもううれしかった。それにひきかえ、あとにやった Z-BACK のひととはどうだ。このバンドを初めて来た人たちが大部分だったらしく、それまで椅子にすわっていた人たちがみんな立ちあがった。ヴォーカルの人の真剣そうな表情、誠実そうな表情、歌詞、それらから感じたのは、全部「震」ってこと。中ロホ(ピュアなもの)の無さをも、ともあるように思わせる体質は心得ているから甘にするのほうもいよね。音なんかもいいしね。ずうと前、有頂天の日に谷野外音楽堂のライブ(「STOP HAND IN HAND TOUR」)で、はじまる前に「これはロックコンサートです。安易ななれあいは危険です」というアナウンスを流したことがあったけれど、Z-BACK と観客は、まさにその危険ななれあひ。たいたことのないって、ほんとといたいたふうにみせるよね。それが危険だっていうこと。

LIVE: マンガツズ in 原宿步行者天国 '93.7.4(SUN)

思いもよらぬマンガツズのLive。練習スタジオが取れなかったからという事でライブを兼ねてライブの感じ。夕方から通しが始まる。今まで聴いていた、演奏していた音がすべて立ちあがったみたい。1つにまとめて前につき出された。Dr.が前へ前へ1977を出して、3人がしつかり橋本さんのバックを固めていてマンガツズがアクティブになった気がした。メンバー4人がマンガツズになった。途中橋本さんが「アレックス」と呼んで黒人の人が走り寄って来て、おんだが再会を喜んで。ら...何と STAND BY ME のセッションを始めて、すく私の心のゆにぶあーとながるものがあって、すげーうれしくなった。ホコ天の裏で他のBANDの音に邪魔される事もなく、通りがかりの人が立ち止まって聴いていく。すくこのびのびしてよかった。

安田 遼子エルのやっているニコニコ (STAY OR GO) Vol. 4 より
マンガツズの次のライブ: 8/10 PEPE'S エレuther 毎土曜夜 新宿駅東口アパルテメント

LIVE: フラワーカンパニーズ 1993.7.6 四谷フォーバレー

はじまってる曲くらいは「んんん」って感じ。ねむそうな表情で歌うヴォーカルのせいだ。ねむくまで目を閉じてきいていた。それが「金沢河鉄道の花のような歌」になったらパッと目がさめて、ステージをしっかりと見られるようになった。歌詞も独特だし、ギター・ベース・ドラムが、ちゃんどヴォーカルをいかす演奏をしている。全体に幼ない子どもたちという感じのだけれど、ステージでの真剣さがとてもいい。曲のタイトルを紹介するときなどのヴォーカルの人の話し方も楽しくて何度も笑えた。名古屋のバンド。

「今年に入ってからのフラカンは、イイベントを結構やってきたんですけど、7月16日は、完全フリーギミック、音目で勝負負のライブをやります。ちやんと前まで、やっぱり今の時代はメロディイードとかかと思って、より言葉が伝わるようアレンジも、シンブルにしてきたんだけど、それはクバンドだから、もっとロックにこだわらなければならぬ。大分サナアレナジ、大胆なギタースソロ、無意味に叫ぶボボカルこれが僕達なのだ。より激しくより哀しいフラカンを、見て下さる。」

フォーバレーのライブを見た次の日、ストリート・ビーンズに見に名古屋のE.L.S.I.に行ったら「月刊E.L.S.I.」が「大原便利Vol.1」が画られて、それに載っていた。

LIVE: 電光石火 1993.6.28 新宿アンティルック



前に1,2回ライブを見たことがあって、そのときは特別いいとは思わなかったけれど、4月にアンティルックのMOON LIGHT KIDSの解散ライブで2曲やって、それがとてもよくて見る気になった。電光石火の歌詞からうかがえるもの、みえてくる風景はありふれたものであるともいえる。か、それらをきくものに伝えるということにものすごいパワーを出している。「ロックンロールがなかったら(オレは)ただのイカれたケンピラ」というような歌詞があったけれど、たいいちに、そういうふうに分を僥倖っていうのがケンピラじゃあないってことだ。そして、そういうふうなロックンロールを大げかにしていることが、歌詞からじゃなくて、ステージ全体から強く伝わってくる。電光石火にはふつうの言葉、ふつうの風景をステージでロックンロールにかえる才能がある。